

9月6日(火)に、421Lab.と岡山県にある美作大学ボランティアセンターの学生で災害支援や地域活動での運営についての交流会が行われました。

この交流会は、地域で活動している美作大学の学生が421Lab.のホームページを見て興味を持ち、活動について話し合いたいという声から実現しました。美作大学の方は、交流会で得た知識をその後に行う熊本での支援活動につなげたいとのことでした。当日は、美作大学から15人もの学生が北九大を訪問し、日々の活動について意見交換をしたり、防災・被災地支援に的を絞ってグループディスカッションをしました。

交流会の企画、準備はすべて両大学の学生によって行われており、準備に携わった北九州市立大学 地域創生学群2年の有馬さんは「8月の初めから美作大学の方と連絡を取り合い、準備を進めてきました。交流会は3時間半と長くとっていましたが、当日は時間が足りずもっと話したいと思いました。」と語ってくれました。また、美作大学の方からも「運営や支援について話すことが出来て良かった。参考になりました。」という声をもらい、両大学にとって貴重な交流となりました。(記事：佐藤優香)



○美作大学とは・・・
岡山県津山市に本拠地をおく私立大学で、「食と子ども福祉」の分野での専門家を養成することを目的とした大学です。
今回、421Lab.を訪問した方々は、美作大学ボランティアセンターに所属しています。

○美作大学ボランティアセンターとは・・・
学生の主体性、自主性に基づく様々なボランティアへの意欲、活動を組織的、体系的に支援し、また学生と地域社会の架け橋としての役割を果たすため2005年に設立しました。
地元にある児童館の子どもたちとの交流や、東北・熊本での復興支援など様々な活動を行っています。



編集後記

『Lab. Times 08』を手にとっただきありがとうございます。内容はいかがだったでしょうか？今回は9月に実施された、熊本支援活動を取り上げています。今、北九州にいる自分たちで何ができるのか、編集している私たちも考えさせられました。『Lab. Times 08』を読んでもくれた皆さんに、少しでも熊本の今が伝わると嬉しいです。次号もよろしくお願いたします。



編集長：平洋子

《プロフィール》
文学部比較文化学科3年
421Lab.の運営スタッフに所属して3年目。身長149.3cmと小柄ながら、頼り甲斐NO.1の副リーダー。前回は引き続き編集長を務める。最近はずんずんに近づぐために、脚のリンパマッサージの記事を読み漁っている。読んだだけなので効果はまだ表れていない。



北九州市立大学 地域共生教育センター (421Lab.)
〒802-8577
北九州市小倉南区北方4-2-1 (北方キャンパス2号館1階)
Open / 10:00-18:00 (月～金)
[Tel] 093-964-4092 [Fax] 093-964-4088
[Mail] info421@kitakyu-u.ac.jp
[Web & Facebook & Twitter]

421Lab.

検索

《編集者：平・佐藤優奈・米村・清水・佐藤優香》



国際交流プロジェクト FIVA

浴衣で町を散策！笑顔あふれる交流に

○イベントの開催○

9月3日(土)にまなびとESDステーションにて、国際交流プロジェクト FIVA (以下：FIVA) が JICA (ジャイカ) 研修員の方と交流を兼ねたまちあるきイベントを行いました。FIVAとは、北九州を訪れた外国人研修員の方々に、日本文化や北九州市の歴史を知ってもらい、北九州に親しみを持ってもらえるようなイベントの企画・運営を行っているプロジェクトです。

研修員の方々は、アフリカの国々から電気技術を学ぶために来日し、約2か月滞在されました。今回のイベントはそんな研修員の方に、「日本文化に触れて、地元の方々との交流をしていただく」という目的のもと実施されました。

○イベントの様子○

イベント当日。プロジェクトメンバーの半分以上が初めてのイベントということもあり、不安と緊張の中、研修員7名を迎えイベントがスタートしました。

まず初めに、地図を使いながら自国の紹介を交えた自己紹介を行いました。研修員の方の自己紹介では、初めて聞く国の名前にメンバーは興味津々でした。研修員の方と会話をしていくうちに、初めは不安そうだったメンバーも笑顔で楽しそうに話し合っていました。



自己紹介を終えた後は、浴衣を着てまちあるきを行いました。研修員の方は自分の着たい浴衣を選び、着つけをしてもらったあと、浴衣を着た自分たちの姿を見て嬉しそう写真に収めていました。プロジェクトメンバーの浴衣の着付けも終わり、4つのチームに分かれて魚町商店街と旦過市場の散策を行いました。旦過市場では、売られている新鮮な魚や野菜を見て「これは何?」「食べられるの?」という研修員の質問に、メンバーは英語を使いながら一生懸命説明を行っていました。また、外国の方が浴衣を着ているのが珍しかったのかお店の方や買い物に来られているお客さんから「今日は何をしているの?」と話しかけられるなど、地域の方とお話することもできました。

今回のイベントが初めての参加だったメンバーに感想を伺うと、「初めてのイベントだったので緊張しましたが、研修員の方がフレンドリーに話しかけてくれ、とても楽しかった。次のイベントでは、自分から声をかけていき、もっと英語を話せるようになりたい!」と語ってくれました。

(記事：佐藤優奈)



震災から6ヶ月 熊本は今

「くまもと GINGA-NET プロジェクト」による被災地復興支援活動



いわて GINGA-NET 主催の「くまもと GINGA-NET プロジェクト」が9/7(水)~9/11(日)の5日間行われ、最も被害の大きいと言われる熊本市益城町を中心に被災地復興支援活動を行いました。今回はこのくまもと GINGA-NET プロジェクトに参加し、5月・6月と定期的に熊本を訪れている、文学部比較文化学科3年の前田謙さんにお話を伺いました。



← 一番被害の大きかった益城町の様子

Q3 「これまで参加した熊本派遣に比べて違いを感じる部分はありましたか」

これまで熊本へのボランティアには5月のゴールデンウィークと6月の土日の計2回行きました。その時は熊本市内のボランティアセンターに入っていたので、被害の大きい被災地を訪れるのは今回が初めてでした。最近はまだ報道もされていないの目に見えていませんでしたが、復興は思っている以上に進んでいないと実感しました。益城町は避難所も集約され仮設団地への引越しも進みましたが、今回の派遣に行った時にも益城町総合体育館で避難生活をしている人は200人ほどいました。

また過去2回の派遣は決まった業務や役割分担のもとで動いていたので「とりえず自分がやれることをしっかりやろう」という気持ちでした。しかし、今回は直に人と接しながら、様々な場所で活動したので、自分が今何をすべきかを自分で考えて行動することが大事だと感じていました。

Q4 「今回の熊本派遣には他大学からも多くの学生が参加していますが、他の学生とはどんな話をしましたか」

毎晩活動の振り返りを行いました。自分が活動したところや、感じた話を話していましたが、全員が共通して考えていたのは今後どうしていくかということでした。熊本県立大の学生はまだまだマンパワーが必要だと感じているのですが、現状としてなかなか人が集まらないと言っていました。しかし、継続的に取り組んでいくには人が必要で、でもボランティアは強制的に人を集

めるものではなくて、でもやっぱり人は必要で... そのジレンマに頭を悩ませていました。熊本以外の県から来ている学生からは、地元へ帰ってから自分の友達や知り合いに被災地の現状を伝え、現地に来てもらうためにはどうしたらいいかという話があがっていました。しかし、それは答えとして見つけることはできず、ある程度もやもやが溜まった状態で今回は解散しました。東日本の支援をずっと行っている人や、自分自身も被災者でありながら避難所運営も主体的に熊本の学生など、経験値のある人たちと議論ができたのは新鮮でよかったです。

Q5 「自分自身、今後どうしていきたいですか」

毎回どの場所でも常套句のように言われますが、知ってもらうことが一番だと思います。百聞は一見にしかず、少しでも関心のある人がいれば、そういった人たちが参加しやすい環境づくり、一歩を踏み出せる仕組みづくりができるといいと思います。そして、必ずその時には熊本県立大の学生を絡ませて、かつ福岡県内の保育・福祉・介護などのノウハウを持てる学部学科の学生が魅力を感じるようなプログラムをパッケージ化して提供できるのもいいのかなと思います。一つ自信を持って言えることがあって、一度こういった活動に参加しているんなら学生と交わったら、その後絶対続くと思うんです。何か感じることもあると思うので、まずは一歩目を踏み出すサポートをしていきたいと思いました。

今回行った19人全員が「1回で終わりじゃない」と感じたと感じています。よく息の長い支援と言いますが、細く長く、まさしくそんな支援を続けていきたいです。(記事：米村)

Q1 「この派遣に参加しようと思ったきっかけを教えてください」

「人と人をつなげていく」お手伝いをしたいと思ったのが動機です。最近、復興支援について、新しい建物を建てるといった箱物づくりより、生活しやすい環境を整えるといった雰囲気づくりが大事なと思うようになりました。震災後の仮設住宅には様々な地域から人が入ってくるため、コミュニティがないと言っても過言ではありません。そんなほぼゼロに近いところからコミュニティや自治会を作り出していくお手伝いをしたいと思い、今回の参加を決めました。

された自宅の整理や仮設に引っ越ししてきたばかりで部屋の整理など、やらなければならない事も多く、話している余裕はないという感じの方も多かったです。また、困り事を尋ねるといっても「何か困っていることはありますか」と聞くだけでは質問が広すぎてしまい深い部分まで聴き出せません。近所付き合い・買い物・家の片付けなど人によって抱える悩みは異なります。普通の会話の中で、それをいかに聴きだすかが難しかったです。

サロン活動ではチラシでの告知も無い初日の声かけの時点で、10人の方が来てくださりました。3人来たらいいかなと思っていたので初めは驚きました。コミュニティが出来ていない分、知り合いもないため話をする機会も少なく、多くの人から「話したくてしょうがない」という印象を受けました。また明日もやりますと言ったら「じゃあ明日も来るね」と言っていたので、この時はとてもやりがいを感じました。



Q2 「どんな活動をしましたか」

今回の活動拠点は益城町総合体育館の周辺でした。木山仮設団地と益城町立広安西小学校の2グループに分かれ、私は仮設団地での活動を主にしました。

木山仮設団地には現在220軒の仮設が建っています。この仮設団地には家20軒ごとに集会所を作るというルールがあり、その集会所を借りてサロン活動を行ったり、仮設団地に住んでいる方への個別訪問を行ったりしました。

仮設団地の入居者は高齢者夫婦が小さな子どもがいる家族世帯が大半でした。個別訪問の際は質問シートに基づきながら、もとの住所や家族構成、困り事などを尋ねてまわりました。手を止めて話してくれる方もたくさんいらっしゃいましたが、被災